

古文書を読む会学習記録

作成日 平成28年 2月28日

開催日	平成28年 2月25日	時 間	10:00～12:00
場 所	新区民活動センター B会議室	出席人数	14名
講 師	真田雅行氏	作成者	杓掛勝利
テーマ	第二学習 奥の細道②		
概 要	<p>(日光の裏見の滝を見→那須野→黒羽→雲巖寺→殺生石・遊行柳→白河の関越え迄)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・那須の黒羽の知人の所へ迂回せず真直ぐな近道に行く。雨降り、日が暮れたので農夫の家に一泊する。翌朝、放し飼いの馬を見つけ、百姓男に馬を貸してくれと頼み込む。「仕事で案内は出来ないが、この道は間違い易く心配なので、この馬に乗って行って、止まった所で返してよこしなさい」と貸してくれた。子供が2人、馬について走ってくる。一人は「かさね」という名の可愛い小娘だった。 <ul style="list-style-type: none"> ○かさねとは 八重撫子(なでしこ)の名なるべし (曾良) (可愛い子を撫子にたとえるが、その名も「かさね」とは、花卉を八重に重ねた八重撫子の名ということであろう) やがて人里に来たので、お金を鞍壺に結び付けて馬を返した。 ・黒羽の館代を訪ねると、大喜びで日夜歓談し、弟の翠桃が朝夕尋ねてくれたり、親戚に招かれたりで何日か過ごした。ある日、那須の与一が扇の的を射た際に祈った八幡宮に参詣した。また、修験光明寺という寺に招かれ、行者堂を拝んだ。 <ul style="list-style-type: none"> ○夏山に 足駄を拝む 首途(かどで)かな (行者堂に役行者ゆかりの足駄を拝み、健脚にあやかり出立の決意を新にした) ・雲巖寺の奥に仏頂和尚山居の跡あり。曾て脇の岩に消し炭で一書いたということだ。山は奥深く、谷合の道が遥に続き、夏4月なのに、今なお冷え冷えと寒い。寺の後の山をよじ登ると、石の上に小さな庵が岩窟にもたせ掛けて建ててあった。当座即興の一句を書きつけ、庵の柱に掛けて記念に残した。 <ul style="list-style-type: none"> ○木啄(きつつき)も 庵は破らず 夏木立 (仏頂和尚の徳に感じて きつつきも庵をつつかないで木立の中に残してくれた) ・館代から馬で殺生石に送られた。この馬の口取り下人が記念に短冊を求める。馬子ふぜいにしては風雅なことを望むものだと、この一句を書いて与えた。 <ul style="list-style-type: none"> ○野を横に 馬引き向けよ ほととぎす (那須の原野に行く馬首を横に引き向けよ。ほととぎすが鳴いて横切った方へ) ○田一枚 植て立ち去る 柳かな (西行法師の「清水流るる柳陰」と詠んだ柳が田の畔に残る。その柳の下で西行を偲ぶ。早乙女たちの神への奉仕(一枚分の田植え)が終り、思いを残しつつ自分もここを立ち去ることだ) ・白河の関に差し掛かって、やっと旅にひたりきり、落ち着いた気分になった。平兼盛がこの関を越えた感銘を何とかして都へ知らせたいと思ったのも分かる。この白河の関は東国三関の一つで、多くの歌人が読み残した古歌や故事があれこれ想起されて、感銘深いものを覚える。古歌に読まれたと同じ卯の花が一面に咲き、更に茨の花が白く咲き加わって、まるで雪景色の中を越えて行くようだ。 <ul style="list-style-type: none"> ○卯の花を かざしに関の 晴れ着かな 曾良 (古人の様にこの関を越える為の衣冠を持たない雲水行脚の自分たちはあたりに咲き乱れる卯の花を晴れ着として関を越えて行こう) 		
次回予定	平成28年 3月10日 10:00～12:00 於: 金沢公会堂3号室 第一学習 赤井村石井家文書③		